

# 京大 広報

Kyoto University



※ P4884 参照



※ P4895 参照



※ P4893 参照

2017.9  
No. 731

## 目次

### [大学の動き]

- 第4回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催 ..... 4880
- 第4回JASTIPシンポジウムを開催 ..... 4881
- 京都大学とマレーシア国民大学との大学間学術交流協定を締結 ..... 4882
- 「京都大学オープンキャンパス2017」を開催 ..... 4883
- 「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内の開所式を挙行 ..... 4884

### [部局の動き]

- 文学研究科修士課程に国際連携文化越境専攻を開設 ..... 4886
- 第21回リカレント教育講座『『心の教育』を考える－家族の理解とその支援－』を開催 ..... 4886
- 第5回高校生のための夏期セミナーを開催 ..... 4887
- 数理解析研究所が高等研究院と理化学研究所と合同で、市民講演会「数理サマー」を開催 ..... 4888
- 佐藤直樹 理事・副学長が実験室の巡視に参加 ..... 4889

### [寸言]

- 日本人の信仰心 遠藤 一秀 ..... 4890

### [随想]

- 障害は個性 ..... 4891  
名誉教授 天野 洋

### [洛書]

- 湯けむりのむこうに 柴田 智郎 ..... 4892

### [話題]

- 平成29年度総長杯(卓球大会)を開催 ..... 4893
- 第16回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を開催 ..... 4893
- 京都大学リーディングプログラム第2回オープンキャンパスin東一条館を開催 ..... 4894
- ミャンマー・イエジン農業大学長が大学院総合生存学館を来訪 ..... 4895

### [訃報]

- 佐々木 光 名誉教授 ..... 4898



京都大学



## 第4回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催

百周年時計台記念館において、第4回「京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウム」(KUIP: Kyoto University-Inamori Foundation Joint Kyoto Prize Symposium) を7月1日(土)～2日(日)に開催しました。

第4回目となる2017年は、2年後の京都賞授賞対象分野である「材料科学」、「地球科学・宇宙科学」、「映画・演劇」の3分野を取りあげ、「夢とロマンをはぐくむ芸術および科学・技術」の統一テーマのもと、2日間にわたって開催しました。シンポジウムでは、世界の最先端で活躍中の11名の専門家と1団体が一堂に会し、一般市民、学生、研究者など2日間合わせて約710名の参加者に対し、学術界と社会の双方から注目されている最先端の話題や興味深いテーマについて熱く語りました。

初日の映画・演劇分野のセッションでは、「人は何のために演じるのか－芸術の人間にとっての意味を考える－」をテーマとして、まず、横仙歌舞伎こども歌舞伎教室(岡山県奈義町教育委員会)の小中学生が「絵本太功記 尼崎の場」の歌舞伎公演を行いました。続いて、劇作家・演出家の平田オリザ 大阪大学COデザインセンター特任教授、人類学者の中沢新一 明治大学野生の科学研究所長、映画監督・脚本家の大森一樹 大阪芸術大学教授の3名の講師が講演し、最後に座長の鈴木晶子 教育学研究科教授を交えた全体討論を行い、コミュニティ、儀礼・儀式、映画等との関わりの中で演ずることの根源的意味、現代に生きる私たち人間にとっての演技や芸術の意味などについて示唆に富む講演・意見交換を行いました。

2日目午前の材料科学分野のセッションでは、「持続的未來のための新しい材料探索」をテーマに、北川 進 高等研究院副院長・特別教授/物質-細胞統合システム拠点長、シャンフイ・ファン(Shanhui Fan) スタンフォード大学教授、十倉好紀 理化学研究所創発物性科学研究センター長、大野英男 東北大学電気通信研究所長の4名の講師が登壇し、化学とナノ空間との融合、ナノフォトニクスとそのトポロジーとの融合、強相関電子系と超伝導・磁性、半導体と磁性との融合といった、境界領域をまたぐ材料探索について、それぞれの分野で先進的な研究を進めてきた研究者ならではの視線で語りました。

午後の地球科学・宇宙科学分野のセッションでは、「地球・宇宙に対する新たな夢とロマン」をテーマに、平 朝彦 海洋研究開発機構理事長、ティム・パーマー(Tim Palmer) オックスフォード大学王立協会(350周年記念)研究教授、小山勝二 名誉教授、ジョスリン・ベル・バーネル(Jocelyn Bell Burnell) オックスフォード大学教授の4名の講師が講演し、地球深部探査船、スーパーコンピュータといった最新のツールを駆使した地球深部観測や地上の気象予測



集合写真

大学の  
動き

に関する成果から、電波望遠鏡を駆使し、創意工夫を凝らすことにより発見した超新星やパルサーなど遠い宇宙の果ての出来事に至るまで、その有り様をつぶさに捉えることができるようになった夢とロマンに溢れる世界について語りました。

その後、クロージング・セッション（3分野合同対話セッション）では、各分野登壇者と本シンポジウムの企画を行った教員に加えて、山極壽一 総長がコーディネータ役として登壇しました。3つの分野それぞれに興味深く、特に他分野の講演が刺激的であり、分野を超えた交流の重要性を再認識したとの意見が多く出ました。最後には、科学・技術は「妥協が許されない」が、芸術は「妥協を受け入れる」といった違いを指摘する意見や、日本の大学が世界のトップレベル入りを志向しても、欧米の大学では当たり前的美術館も劇場も持たない（芸術に対する理解が十分ではない）ようでは、それも難しいのではないかといった意見が出るなど、大変考えさせられる興味深いディスカッションとなりました。

聴講者からは、「映画・演劇分野のプログラムが変化に富み内容が豊かで面白かった」、「演劇に対する考え方が変わった」、「どのようにして現実から未来社会への可能性が開けていくのか、また、どのようにして夢だと思われていたような技術を現実のものとしていくことができるのかについて、大変参考になる話を聞くことができた」、「1日目の映画・演劇の内容も、2日目のナノの世界から宇宙の起源におよぶ広大な世界の研究も、まさに共通の基盤が人間の夢とロマンにあることがわかった」、などの感想が寄せられました。

（総務部（渉外課））

[目次に戻る ↗](#)

## 第4回 JASTIP シンポジウムを開催

「日ASEAN科学技術イノベーション共同研究拠点-持続可能開発研究の推進」(JASTIP)は、タイ国立科学技術開発庁 (NSTDA) Grand Hall, Thailand Science Park Convention Centerにおいて、「第4回 JASTIP シンポジウム - Biomass to Energy, Chemicals and Functional Materials -」を7月3日(月)、4日(火)に開催し、日本、タイ、インドネシア、シンガポールから合計256名にのぼる多くの方々に参加いただきました。

今回のシンポジウムは、NSTDA、インドネシア科学院 (LIPI) と共催し、文部科学省、ASEAN工学系高等教育ネットワーク (AUN/SEED-Net)、日本学術振興会 (JSPS)、科学技術振興機構 (JST)、新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)、戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) からの後援を受けて、合計23の民間企業、NPOの協賛により開催されました。

本シンポジウムでは、Natchanapong



左から、河野泰之 東南アジア地域研究研究所長、Narong Sirilertworakul NSTDA 長官、Natchanapong MOST 監査官、Bambang Sunarko LIPI 生物学研究センター 所長、佐渡島 大使、小林治 JST 国際部長

大学の  
動き

Vajiravongburi タイ科学技術省 (MOST) 監査官 (博士) や佐渡島志郎 タイ駐劔日本国特命全権大使などにご臨席, ご挨拶を賜り, 内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) 「次世代農林水産業創造技術」プログラムディレクターである野口 伸 北海道大学教授による特別講演を含む18の最新の研究発表が行われ, JASTIPの中心的研究課題である環境・エネルギー分野と生物資源・生物多様性分野に跨るバイオリファイナリー研究について, ASEANにて国際共同研究を行っている日本の研究者に現状・課題についてご紹介いただくとともに, JASTIPのカウンターパートナーであるNSTDAおよびLIPIにおけるバイオリファイナリー研究の紹介, さらには, タイ国にてバイオリファイナリーに関連する企業を招いて, 事業活動についてご紹介いただきました。

また, 本シンポジウムでは, 口頭発表とともに, 18の企業およびファンディングエージェンシーのブース展示, 49枚のポスター展示を行い, 日ASEANの科学技術協力連携促進・産学連携のプラットフォームとしてのJASTIPの機能を多くの方に知っていただくよい機会になりました。



シンポジウム参加者の集合写真

(企画・情報部 (企画課))

[目次に戻る ↗](#)

## 京都大学とマレーシア国民大学との大学間学術交流協定を締結

稲葉カヨ 理事・副学長が, 8月8日 (火) にマレーシア国民大学 (Universiti Kebangsaan Malaysia : UKM) を訪問し, アブドラ・バダウィ マレーシア前首相, 折笠弘維 在マレーシア日本国大使館公使参事官ご臨席のもと, 京都大学とマレーシア国民大学との大学間学術交流協定の調印式に出席しました。

UKMとは, 同行した小杉 泰 教授が所属するアジア・アフリカ地域研究研究科や, 農学研究科, 工学研究科がかねてより学術交流を行っており, 今回の協定の締結により, 今後は全学規模での交流進展や深化が期待されます。

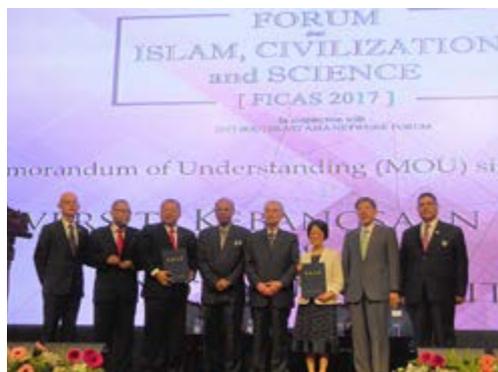
また稲葉理事・副学長は, 調印式に引き続き開催された東南アジアネットワークフォーラム



協定書に署名する稲葉理事・副学長

大学の  
動き

において講演し、これまでの本学とマレーシア各大学との交流の実績などを紹介するとともに、今後のさらなる発展に期待を寄せました。



調印式後の集合写真（稲葉理事・副学長の左がバダウィ前首相、右が小杉教授、左端が折笠公使）



講演する稲葉理事・副学長

（企画・情報部（国際交流課））

[目次に戻る ↗](#)

## 「京都大学オープンキャンパス 2017」を開催

「京都大学キャンパスライフ 夢を描く2日間。」をメインテーマに、京都大学オープンキャンパスを8月9日（水）・10日（木）の2日間開催しました。猛暑の中、今年度も多くの高校生、保護者らの参加がありました。

百周年時計台記念館百周年記念ホールでは、若林直樹 オープンキャンパス委員会委員長（経済学研究科教授）による司会のもとオープニングセレモニーを行いました。山極壽一 総長による「京都大学を目指す皆さんへ」と題する講演があり、参加者は皆、熱心に耳を傾けていました。続く京都大学応援団による演舞では、力強い演舞・演奏とユーモアも交えたエールが送られ、会場内は大いに盛り上がりました。その後、「在学生からのメッセージ」では、総合人間学部と理学研究科の先輩が自らの受験体験や大学生活について参加者に語りかけました。

また、9日には総合人間学部・文学部・医学部医学科・医学部人間健康科学科・薬学部・農学部、10日には教育学部・法学部・経済学部・理学部・工学部がそれぞれ学部説明会を行い、学部長等による歓迎挨拶の後、学部の紹介や模擬授業、体験学習、研究室訪問など各学部の様々な企画に参加者は満足気な様子が見られました。

キャンパスツアー、在学生交流コーナー、相談・資料コーナー、京大教員による講演会、在学生によるサークル紹介などの企画や、国際交流ホールで実施した学部紹介コーナー、教員著書・



総長講演



テク女子懇談会

大学の  
動き

ポスター展示の企画も昨年同様に好評でした。また、附属図書館、総合博物館、百周年時計台記念館展示ホールの見学も盛況で、2日間ともキャンパス内が多くの参加者で賑わいました。

受験生の志望校選びにオープンキャンパスはますます重要なものになっています。今回のオープンキャンパスへの参加を通して、本学の雰囲気や魅力を十分に感じていただき、入学への意欲を一層高められたことと期待しています。



模擬授業



キャンパスツアー



応援団演舞



相談コーナー

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

## 「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内の開所式を挙行

本学は、京都の9つのパートナー大学とともに、京都の文化・芸術・科学について学術面から情報発信し、さらに京都の魅力や価値を高めるため、新丸の内ビルディング10階にある京都大学の東京オフィスの隣接スペースに、「京都アカデミアフォーラム」を7月3日(月)に開設し、7月12日(水)に開所式を執り行いました。

開所式では、山極壽一 総長の開会挨拶ののち、阿曾沼慎司 理事より京都アカデミアフォーラムの開設の経緯・概要説明等があり、パートナー大学学長等および門川大作 京都市長によるテープカットが行われました。

その後、鷲田清一 京都市立芸術大学理事長・学長による乾杯の挨拶により懇談会が開始され、懇談会では、京都アカデミアフォーラムのパートナー大学等の関係者のほか、



開会の挨拶を行う山極総長

大学の  
動き



開設の経緯等を説明する阿曾沼 関係者によるテープカット  
理事

国会議員、産業界からの出席者も含め、総勢100名を超える多数の出席がありました。また、懇談会では、門川市長からの京都アカデミアフォーラムに対する期待等について挨拶をいただき、最後に、竹宮恵子 京都精華大学学長より閉会の挨拶がありました。

【京都アカデミアフォーラムパートナー大学】 2017年7月12日現在

京都外国語大学, 京都光華女子大学, 京都工芸繊維大学, 京都女子大学, 京都市立芸術大学, 京都精華大学, 京都橘大学, 京都美術工芸大学, 同志社女子大学, 京都大学

【参考 URL】

「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内の開設について発表しました。(2017年3月24日)

[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events\\_news/office/kenkyu-suishin/sankangaku-renkei/news/2016/170324\\_1.html](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events_news/office/kenkyu-suishin/sankangaku-renkei/news/2016/170324_1.html)



鷲田理事長・学長（京都市立芸術 門川京都市長による挨拶  
大学）による乾杯の挨拶

竹宮学長（京都精華大学）による  
閉会の挨拶

京都アカデミアフォーラムは、本学教職員（元教職員を含む）、  
本学学生、本学卒業生ほか関係者の方などにご利用いただけます。

開館日	原則、平日（月曜日～金曜日） ※ ただし、土・日・祝日で会議室利用がある場合は開館
利用時間	8時30分～21時00分
利用可能施設	会議室 4室 ※大会議室C・Dは、つなげてご利用いただけます。 ①大会議室C（60㎡） ②大会議室D（68㎡） ③中会議室（30㎡） ④小会議室（15㎡）
予約 お問い合わせ	京都アカデミアフォーラム予約担当（受付時間 平日9：00～17：00） Mail：kyoto-academia-forum@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp 電話：075-753-9721

（研究推進部（産官学連携課））

目次に戻る ↗



## 文学研究科修士課程に国際連携文化越境専攻を開設

文学研究科では、6月27日付で文部科学省より設置認可を受け、ドイツのハイデルベルク大学トランスカルチュラル・スタディーズ・センター (Heidelberg Centre for Transcultural Studies) との国際共同学位 (ジョイント・ディグリー) プログラム「京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻」を本年10月に開設します。本専攻は、ジョイント・ディグリー課程として、本学初であるのみならず、人文社会系において日本初の設置となるものです。

本専攻は、両大学がそれぞれの強みを活かし、アジアとヨーロッパにまたがる大学院教育を共同で行うことで、人文社会系の融合的研究能力と国際的発信能力を兼ね備え、グローバルな場で活躍できる人材の育成をめざします。

本専攻の学生は、日本・ドイツに各2学期在学して「知識・信念・宗教 Knowledge, Belief and Religion」「社会・経済・統治 Society, Economy and Governance」「視覚・メディア・物質文化 Visual, Media and Material Culture」の3分野のうち1分野を選んで学び、国際共同指導を受けて英語の修士論文を作成します。日本側 (2018年4月入学者) での募集要項は、本年10月上旬に文学研究科から公開します。

(大学院文学研究科)

[目次に戻る](#)

## 第21回リカレント教育講座「『心の教育』を考える一家族の理解とその支援」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家 (幼・小・中・高校教諭、養護教諭、児童養護施設関係者、心理臨床専門家等) を対象に、研修活動の一環として、リカレント教育講座を開催しています。不登校、非行、いじめ、発達障害など、現在の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることをねらいとしており、毎年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得ています。

第21回となる今回は「家族の理解とその支援」を全体テーマとして、8月20日 (日) に開催し、71名が受講されました。午前には、学校臨床や家族の支援、カウンセリングに長年かかわって来られた3名のシンポジストをお迎えし、「家族の理解とその支援」をテーマにシンポジウムを行い、午後には分科会に分かれて事例研究を行いました。

シンポジウムでは、3名のシンポジストがそれぞれ、親の夫婦関係と子どもの心の在りようと



シンポジウムの様子

のつながりや、学校現場での子どもとその家族の支援、それに関わる学校現場の様々な職種同士の連携についてなど、幅広い視点からお話をいただき、後半、受講者を交えたディスカッションを行いました。事例研究では、教育現場における個別事例を素材として受講者と講師が活発に意見を交わしました。参加者からは、「教師や臨床心理士、児童養護施設職員などさ



まざまな立場の方と意見を交わすことができ、大変勉強になりました」、「先生方のお話が学校現場の課題と密接に関わるものであり、実感を持って聞くことができました」などの感想が寄せられ、大変好評でした。「このような場を毎年設けていただき、ありがとうございます」という声も多くいただいており、来年度以降も本講座を引き続き開催していく予定です。

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

## 第5回高校生のための夏期セミナーを開催

人文科学研究所では、東アジア人文情報学研究センターで、第5回高校生のための夏期セミナー「東方学研究への招待」を8月8日(火)に開催しました。

本セミナーは、将来を担う高校生に漢字の面白さ、奥深さをわかりやすく紹介し、漢字文化全般に関心を深めてもらおうと企画したものです。台風直後にもかかわらず、東京から沖縄まで6名の高校生が参加しました。



熱心に聞き入る高校生

岡村秀典 東アジア人文情報学研究センター長の挨拶に始まり、古勝隆一 人文科学研究所准教授が「いろいろな漢文を読んでみよう」、高井たかね 同助教が「明清の暮らしをかいま見て」のレクチャーを行いました。レクチャー後、センターの見学を行い、最後の座談会では熱心な質問や議論が行われました。

参加者からは「漢字にとっても興味が湧きました」、「東アジアの研究をすることで人間への理解を深めたいと思いました」、「とても興味深い分野で面白いし、(漢文を)自力で読めるようになりたいと思いました」等の感想が寄せられました。



古勝准教授によるレクチャーの様子



高井助教によるレクチャーの様子

(人文科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)



## 数理解析研究所が高等研究院と理化学研究所と合同で、市民講演会「数理サマー」を開催

数理解析研究所では、昨年、京都大学と理化学研究所の間で結ばれた連携・協力の協定に基づいて、市民の皆さんと一緒に数理科学の最先端に触れ新しい展開を考えることを趣旨とした市民講演会「数理サマー」を高等研究院と理化学研究所数理創造プログラムと合同で京都大学益川ホールにて7月30日(日)に開催しました。

合同市民講演会では、まず、森 重文 高等研究院長が主催者を代表して開会の挨拶を行い、理化学研究所と数学とのつながりについて説明を行いました。続いて、國府寛司 理学研究科教授から、挨拶と理学研究科数学・数理解析専攻と理化学研究所数理創造プログラムとの連携について説明を行いました。その後、それぞれの機関から講演者が登壇し、研究内容を紹介しました。牧野和久 数理解析研究所教授は、計算量理論の基礎的な概念を説明すると同時に、高速アルゴリズム設計の意義や重要性について、長瀧重博 理化学研究所数理創造プログラム (iTHEMS) 副プログラムディレクターは、スーパーコンピュータを用いた大規模数値シミュレーションを駆使した究極の現象「天体ビッグバン」の解明について、Daniel Packwood 高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) 講師・主任研究者は、数学の様々な分野(確率論、統計的学習理論など)がどういった形で材料科学与連携するのかについて講演を行いました。最後には、3講演に対しての質疑応答や活発な意見交換が行われ、終了しました。当日は暑いななか、高校生、中学・高校の数学教員や数学に興味のあるシニアの方まで多数の参加者があり、最先端の数学研究に触れる貴重な機会となりました。



開会の挨拶をする森院長



挨拶をする國府教授



講演を行う牧野教授



講演を行う長瀧副プログラムディレクター



講演を行う Packwood 講師

(数理解析研究所)

[目次に戻る ↗](#)



## 佐藤直樹 理事・副学長が実験室の巡視に参加

8月23日(水)に、病院東構内にある旧産婦人科病舎を対象として、実験室の巡視を臨時に実施しました。国立大学は平成16年から法人化され、これに伴い労働安全衛生法の適用を受けるようになったことは周知のとおりです。本法では、衛生管理者による作業所等の巡視が義務づけられており、安全で快適な職場の形成に資する自主的活動も促しています。

今回の巡視は、財務・施設・環境安全保健担当の佐藤直樹 理事・副学長をはじめ、大畠幸一郎 環境安全保健機構長、秋山明寛 施設部部長も参加して、部局の衛生管理者や現場の担当教員等からの説明も受けながら行いました。

佐藤理事・副学長からは、「歴史ある、しかし狭隘な建物の中で、実験スペースの確保と効率的な作業に腐心されている点も散見され、安全管理についても注力している印象を受けた。本学では残念ながら昨今火災が頻発していることも踏まえ、引き続き、安全衛生管理にご尽力いただきたい」との講評がありました。



巡視の様子

(環境安全保健機構)

[目次に戻る ↗](#)

## 日本人の信仰心

遠藤 一秀



学生時代、折角京都に居るのだからと寺社巡りを始めたが、教養の2年間ほどしか続かなかった。それから40年余り、ビジネス本を脇に置き日本古代史のつまみ読みが始まった。多くは新書や文庫タイプの軽い「古代史モノ」だが、なつかしい著者名 上田正昭に惹かれ「古代史論」の類も手にするようになった。その結果、古社古寺の由来にも興味が及んだ。そこで日本人の信仰心について雑感を述べてみる。

高山、巨岩、巨木から嵐・雷・噴火など様々な自然界の神羅万象に靈魂が宿っていると考えるアニミズム(精霊信仰)は、一般的には、未開人の習俗、無節操な信仰として蔑まれてきた。絶対神を信じる宗教は、大自然をも超越した唯一神とその神に選ばれた信徒を、他の自然よりも上位に位置付け、人間が自然を克服し、支配できるとの思想となり、自分達以外を異教徒・邪教徒と軽蔑することにもなった。

一方、原始時代以来のアニミズム的信仰心を残す日本人は、八百万の神々を祀る多神教で、外国伝来の仏教、儒教、道教、さらにヒンドゥー教の仏や神々まで受入れ信仰の対象としてきた。その結果、宗教対立が少なく、政権交代があっても、前政権の宗教を排斥することは少なかった。古い神社や寺院が多く残されているのも、この汎神論的信仰心の結果と思われる。

時代が農耕時代となり、集団生活、定住生活が定着すると、「ご先祖様の靈が我々を見守っていてくれる」という祖霊信仰が生まれた。墳丘墓や古墳は死者を埋葬した場所というより、先祖の靈を祀る祭場だった。各地に小国ができると、祖先靈だけでなく、その共同体支配者の祖先靈を、地域の最高神として祀る首長靈信仰に発展した。奈良時代になって日本神話が整備されたが、その際も各地の山之神、雷神など精霊信仰の神々や、各地の首長・豪族の祖先靈を祀る神々も存続した。爾来、現代にいたるまで英雄や敗者の靈を祀る神社が造られた。死者を祀る風習は東アジアのごく限られた国々にしかないようだ。毎日仏壇に向かい先祖の位牌を拝み、お盆に帰ってくる先祖の靈に供物を捧げて迎える風習は、仏教本来のものではなく、祖霊信仰のなごりともいわれている。

かつての信仰は、神と仏、神官と僧侶、神社と寺院は融合調和して一体化した神仏習合あるいは神仏混淆という状況だった。早くも奈良時代から神仏習合が進み日本仏教として日本独自の宗教、習俗として発展してきた。明治初期の神仏分離でも、神道国教化の動きは徹底せずに終わり、神社と寺院は形式的には分離されたが、神社と寺院を共に参拝する神仏習合は、現在でも風習となっている。

日本人には特定の神を崇める宗教心がなく、従って道徳的な規範がないともいわれる。しかし見方を変えれば、精霊信仰のなごりと思える大自然に対する畏敬の念と、先祖を敬う祖霊信仰を残し、他宗教他宗派の神仏を寛容に受け入る多神教的包容力を備えた我々の信仰心にも捨て難いものがある。

(えんどう かずひで、遠藤科学株式会社取締役社長 昭和46年経済学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

## 随想

## 障碍は個性

名誉教授 天野 洋



今年3月末に定年退職し、その3ヶ月前までに主たる所属学会を退会しました。4月下旬に京都の片田舎に転居し、併せて種々の断捨離を実行しました。自由な時間を使って、野菜栽培・いや、雑草取りに明け暮れています。一心に草を抜いていると、一本の草とはいえ諸条件で根ごと抜けたり、根が残ったり・色々です。そのような時、大学教員として歩んだ36年の記憶が走馬燈のように蘇ります。

30歳代半ばのある晩、東京近郊のお宅で知人(カナダからの来訪者)と共に夕食にあずかっていました。招いて下さった老夫婦は気品あるカップルで・ただ、私にとって初めての経験は・食事の前に、ご主人がすべての食材と食器を指の感覚で確認することです。医師としてのインターン中に視力を失った小林 優 牧師でした。ご夫妻と知人は知己の仲ですが、彼の視覚障害の事を私は事前に知りませんでした。初めての光景に、私は緊張し会話も途絶えがちでしたが、気さくなご夫妻の態度に徐々に和まされ、その後にお聞きできたメッセージが、私の教員人生を支えます。「障害ではなく、障碍です」そして「障碍は個性です」・・。「害」ではなく「碍(さまたげ)」と客観視し、さらに、障碍も「特段の個性」だと語られました。この言葉(認識)は、その後の30数年にわたる私の教員人生に、安定感(尺度)を与えてくれます。

聖書には、「主なる神は、土の塵で人を形づくり・・」「わたしたちは、このような宝を土の器に納めています」と記されています。宝は個性と考えられ、それを、土の器に納める・障碍者の器は壊れやすくもありますが、個性と考える。障碍には肉体的なものに限らず、精神的、社会的など種々あるでしょうが、周りにいる私たちはぶれない自分の尺度を持つ事が大切なかも知れません。器の素材が「土」であることも秀逸です。堅固であっても柔軟性を欠く素材では、長い人生に耐えられないかも。また、軟弱な素材では耐久性に自信が持てません。

器に納められる宝であるヒトの個性(タラント)も多様で、共に歩む教員も経験を積んで自身を豊かにするしかありません。AさんとB君は、私が若い頃に持った同級生の学生でした。担当講義の期末試験で、私はかなりの質量の問題を問いました。通常は90分の試験ですが、試験時間と答案用紙は無制限。Aさんは、一度も淀むことなく60分もかからず1枚の答案用紙を提出して退出。B君は鉛筆と消しゴムを駆使すること2時間半、疲労困憊の体で4枚の解答用紙を仕上げました。二人の解答はともに満点でした。これこそ「個性」なのでしょう。その後、二人は国家上級試験に上位合格し、今は農林水産省系の研究所で国家プロジェクトをそれぞれ率いています。このような豊かな個性が社会を支えるのでしょうか。

教員が若き学生諸君に与えられるモノは多くありません。彼らが持ち合わせる宝(個性)を納める「土の器」を整えるくらいかと思います。そして、私たち教員の持続性は時を共にした学生諸君の歩みと、出会った人々から得られた言葉などが紡がれて、成り立っているのではないのでしょうか。庭の雑草を抜きながら、このような日々雑感の世界に浸っています。

(あまの ひろし, 平成 29 年退職 元大学院農学研究科教授 専門は天敵生物学)

[目次に戻る ↗](#)

## 洛書

## 湯けむりのむこうに

柴田 智郎



「ふうっ」と息を吐く。気温はマイナス10℃、髪の毛は凍ってバリバリになる。寒さで凝り固まった体と心がだんだんほぐれ、「極楽、極楽」。ここは真冬の北海道。仕事が終わって、露天風呂に入っているときほど、温泉の研究をしていて良かったと思うことはない。

京大に就職する前の16年間、北海道の研究所に勤めた。私の温泉研究はここからはじまった。温泉法では細かく定義されているが、概略すると、温泉は温度や溶存成分濃度が高い地下水である。固体地球は地殻と呼ばれる岩石で表面が覆われているが、地殻は地表面から深くなるにつれて温度が高くなる。水の温度が高いということは、地殻の深いところからきていることを示している。水はどんな物質とも反応する溶剤で、地殻の岩石を溶かす。成分濃度が高いということは、多くの岩石と反応した証拠である。温泉は地殻の情報と履歴を所持している。

温泉の3要素と呼ばれるものがある。2つは前述の温度と溶存成分であり、もう1つは水位である。水位は地下にある帯水層（地下水に満たされた地層）内の圧力を示している。これらの3要素は季節により変動しているが、過度な汲み上げ、あるいは地震や火山活動があると異常な変化が見られる。温度や溶存成分は水の流動に依存するので、変化が現れるのに時間がかかるが、水位は圧力変化なので、原因となる変化とほぼ同時にあらわれる。帯水層の特性によるが、感度の良いひずみ計のように振る舞うものもある。

火山に関係する温泉がある。高温の火山ガスが地下水に混入し、浅部に温泉の帯水層を形成する。亀裂や割れ目などを通して、地表面まで上昇し、温泉として湧出する。場合によっては、帯水層をめがけて井戸を掘り、汲み上げている温泉もある。2000年有珠山噴火の際、北麓にある洞爺湖温泉では噴火の数ヶ月前から温泉の汲み上げ量が減少した。この温泉地では資源管理のために水位観測をしている。そのデータを見ると、噴火の半年前から異常な水位低下があり、3ヶ月前にはその低下が著しくなった。噴火前に生じたわずかな火山活動の変化が温泉にあらわれたと考えられる。

現在所属している理学研究科附属地球熱学研究施設は別府市にある。ここは言うまでもなく温泉の街で、あちこちで湯けむりがあがり、時折、温泉特有の匂いが一帯を覆う。昨年熊本地震では温泉の水位や溶存成分に変化があった。昔から地震や火山噴火の前に温泉が変化すると言われるが、活動の前に起きるわずかな変化を徴していることを想到させる。温泉を通して地球の活動にあれこれと構想をめぐらせながら、今日も湯けむりの中を歩いている。

（しばた ともお、大学院理学研究科附属地球熱学研究施設准教授 専門は地球化学、陸水学）

[目次に戻る ↗](#)

話題

## 平成 29 年度総長杯（卓球大会）を開催

7月7日(金) 総合体育館(地下1階卓球場)において平成29年度総長杯卓球大会が行われ、昨年より2チーム多い16チームが参加しました。当日はかなりの蒸し暑さでしたが、それに負けない熱い声援で場内はたいへんな盛り上がりを見せ、それぞれのチームが優勝を目指して白熱した試合を展開しました。決勝戦は、工学研究科「桂AB・Z」(代表者:今井敦宣)チームが、数理解析研究所の「数理解析卓球所」(代表者:岸本典文)チームを2対1で下し、見事に優勝しました。試合終了後の表彰式では、宇野圭助 総務部人事課福利厚生室長から優勝、準優勝チームに賞品が贈られました。



優勝した「桂 AB・Z」チーム



準優勝した「数理解析卓球所」チーム

(総務部(人事課))

[目次に戻る ↗](#)

## 第 16 回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院(以下、京大病院)は、第16回京大病院 iPS細胞・再生医学研究会を芝蘭会館で7月28日(金)に開催しました。同研究会は、京大病院でのiPS細胞、ES細胞および体性幹細胞などを用いた再生医学研究の向上および成果の普及を図り、医療の発展に貢献することを目的として2009年11月に発足し、今年で8年目となりました。第16回目となる今回の研究会では、学内外から110名を超える医療関係者等が参加しました。

研究会では、稲垣暢也 病院長の開会挨拶の後、宮本憲優 エーザイ株式会社グローバルCV評価研究部主幹研究員が「ヒトiPS細胞由来分化細胞を用いた薬物誘発リスク評価への取り組み」について一般講演を行いました。また、堂前圭太郎 大阪大学医学部附属病院ハートセンター特任助教が「重症心不全に対する心臓再生治療の現状と課題」、前川平 京大病院輸血細胞治療部教授が「京大病院・細胞プロセッシングセンター(CPC)の設置と経緯～アカデミアCPCのstanding position～」, 中井清人 厚生労働省医薬・生活衛生局医療機器審査管理課長が「厚生省での再生医療等製



研究会で開会挨拶を行う稲垣病院長



高橋教授による特別講演

話題

品に対する規制の動き」と題して、それぞれ学術講演を行い、参加者は最新の研究成果について熱心に聞き入りました。

引き続き、高橋 淳 iPS細胞研究所教授が「パーキンソン病に対する幹細胞移植治療」と題した特別講演を行いました。講演後の質疑応答では活発な議論が展開され、研究会は盛会のうちに終了しました。

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

## 京都大学リーディングプログラム 第2回オープンキャンパス in 東一条館を開催

昨年に引き続き、5つのリーディングプログラム合同による、「第2回オープンキャンパス in 東一条館」を7月2日(日)に開催しました。

リーディングプログラムとは、地球社会にあるグローバルな課題を解決するために、博士課程5年一貫制で、専門分野の枠を超えて、幅広い知識、俯瞰の視野、実践力を備えた人材を育成する教育プログラムです。

本学には、「総合生存学館(思修館)」、「グローバル生存学大学院連携プログラム(GSS)」、「充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム(LIMS)」、「デザイン学大学院連携プログラム(デザイン)」、「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院(PWS)」の5つのリーディングプログラムがあります。

オープンキャンパスでは、このリーディングプログラムをもっと知ってもらおうと、東一条館全



模擬授業の様子。「逆さメガネ」を覗く参加者



参加型の模擬授業



学生からのメッセージ (1)



学生からのメッセージ (2)

話題

体を使って、パネルによる紹介展示、紹介プレゼンテーション、模擬授業、学生からのメッセージ、相談ブースを実施し、いろいろなコンテンツを通じて理解を深めていただくよう工夫しました。

当日は、本学学生だけでなく、他大学の学生や地域の方々にも参加いただき、おかげさまで盛況となりました。模擬授業では、「逆さメガネ」を使ったユニークな手法による知覚的適応研究のデモが行われたほか、相談ブースでは本学教員との活発な質疑応答が行われていました。

アンケートでは「面白かった」との回答が一番多く、参加者の皆さんには楽しみながらリーディングプログラムについて理解を深めていただけたように思われます。



紹介パネル展示と相談ブース



相談ブース



紹介プレゼンテーション

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↗](#)

## ミャンマー・イエジン農業大学長が大学院総合生存学館を来訪

大学間学術連携協定の署名締結のため来学された Myo Kywe イエジン農業大学長および Aye Aye Myint 同畜産学科長・准教授が、署名式翌日の7月12日(水)に総合生存学館を来訪され、総合生存学館教職員および学生との歓迎交流会に参加されました。同大学は総合生存学館が実施している、ミャンマーでの海外インターンシップにおいて、現地での



木邨特定教授による司会進行



川井特定教授による説明

話題

学生の活動に協力をいただいている機関でもあります。

冒頭に司会進行役の木邨洗一 特定教授の参加者の紹介の後、川井秀一 特定教授から総合生存学館の教育理念や概要説明がなされ、続いて、磯部洋明 准教授が、文理融合のユニークな研究事例として、「歴史書を使った過去の太陽活動の研究」と「宇宙開発とその倫理、社会問題」について講演を行いました。

さらに総合生存学館大学院3年生のパン宇年さんが、2016年度の海外インターンシップにおけるミャンマーでの活動の様子を写真と動画を交えて紹介した上で、参加した学生全員が、自



ミャンマー語のTシャツおよびミャンマーの民族衣装であるロンジーを着用して講演する磯部准教授



講演「歴史書を使った過去の太陽活動の研究」と「宇宙開発とその倫理、社会問題」



2016年度の海外インターンシップ、ミャンマーでの様子を紹介



パンさんによる活動紹介



学生の自己紹介と研究テーマの紹介

話題

己紹介と研究テーマを紹介しました。

最後に、Myo Kywe 学長から挨拶をいただき、ディスカッションおよび質疑応答がなされ、一層の相互理解が深まりました。



Myo Kywe 学長からの挨拶



ディスカッションの様子（左から Aye Aye Myint イエジン農業大学畜産学科長・准教授と、Myo Kywe 学長）



集合写真

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↗](#)

## 訃報

このたび、佐々木 光 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。



## 佐々木 光 名誉教授

佐々木光先生は、平成29年6月5日に逝去されました。享年85歳。

先生は、昭和30年3月に京都大学農学部を卒業、同年4月京都大学木材研究所助手に採用され、昭和39年4月同助教授を経て、昭和52年8月同教授に昇任されました。平成3年4月改組により木質科学研究所教授・所長に就任、平成7年3月京都大学を定年にて退官後、平成7年4月秋田県立農業短期大学教授、同年6月同木材高度加工研究所所長に就任、改組により平成11年4月秋田県立大学木材高度加工研究所教授・所長、平成14年3月に定年にて退職されるまで、京都大学ならびに秋田県立大学の研究・教育に努め、京都大学名誉教授および秋田県立大学名誉教授の称号をそれぞれ平成7年4月および平成14年5月に授与されました。さらに、平成14年2月に(有)ヘリクスを設立され、代表取締役や相談役を歴任されました。

先生は長年に亘り木質材料の研究と教育に携わられ、木質材料の製造原理に関する研究や新規材料とその生産・利用技術の開発、およびその実用化に大いに尽力されました。先生の業績は内外で高く評価され、昭和41年に日本木材学会賞、平成14年に能代市特別表彰、平成22年に秋田県文化功労者表彰などを受賞され、さらに平成22年には瑞宝中綬章を授与されました。

また先生は、日本木材学会会長をはじめ、国際木材科学アカデミー特別会員、南京林業大学名誉教授など、内外の関連学協会と産業の発展に多大な貢献をされました。

(生存圏研究所)

[目次に戻る ↗](#)